
東方時間歪 ~ Broken stream of the time.

春夏秋冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方時間歪 ～ Broken stream of the
time .

【Nコード】

N6305T

【作者名】

春夏秋冬

【あらすじ】

ある日、学校の帰り道にコンビニに寄った女子学生、下村奈月。しかし、よく見ると入ったのはコンビニではなく、いや、建物にさえ入っていなかった。

そんな彼女が織り成すストーリーです。

この小説を読んでくださっている皆様へ。

この度、春夏秋冬は以下のサイトへ小説を移転しました。

<http://story.awalker.jp/shunka-shuto/>

10話より後の話はすべて上記のサイトで書いていきますので、よろしく願います。

F i r s t h a p p e n (前書き)

少女は幻想入りを果たす…

First happen

夏の暑い日ざしが人々を襲う。

その暑さで人々の動きは疲れきったような動きをしている。

その「人々」には、下村奈月《しもむらなつき》も例外なく含まれていた。

場所は日本、時は昼間。

奈月は、制服で街の商店街を歩く。何故かというと、今日は奈月の通う学校では登校日だからだ。

そう、奈月は学生なのだ。だから制服を来て歩いているのだ。

「暑いー、死にそう」

そんなことを呟きながら歩く。

そして、水をかぶったように汗をかきながら。

しばらく歩くと、街の商店街の出口に出た。

出口の正面には、コンビニがあった。

「…はあ…一回入ろう…」

奈月は、そのコンビニに吸い込まれるように入っていく。

暑さからの開放を求めて。

そして、ドアが開く。

“いらっしやいませ”

高い声が奈月を迎え、奈月の体から熱気を取り払う。

そして、奈月に涼しさを与える。

「ぶっ…」

奈月は、ため息をつく。暑さから開放された安堵感からだろうか。でも、何かがおかしい。

静かすぎる。

コンビニといえば店内で何か曲が流れるだろうし、クーラーの動作音だって聞こえるはず。それなのに、何も聞こえない。そして…暗い。

「…！」

その答えは簡単だった。

奈月が居るのはコンビニではなかった。

奈月は、お店の前にいた。

お店といつても先ほど入ったコンビニの前ではない、他の店だ。しかも、結構古そうだ。

「え…え！？ここはどこ！？」

奈月は思わず上を見上げる。

すると、看板が視界に入った。

「こつ…りんどう？」

驚いていると、店の中に人影が見えた。そして、

「ん？誰？何か用かい？」

First happen (後書き)

ちよつと状況の描写が多かったかな、と思つてます。
そして超展開を入れました。

Meet owner (前書き)

少女は店主に会う…

Meet owner

「わっ!」

奈月は驚く。

無理もないだろう。

「ん?…」

人影は人となる。そして、奈月はその人を「眼鏡をかけた着物を着た男性」と認識した。

「え、え、あの、ここは」

状況の変化が早すぎて奈月はパニックになっている。

「落ち着けよ。僕は君を食べたりはしないよ」

男は喋る。

「……」

「どうした?」

状況を把握していない男は奈月に問う。

奈月自信、状況の把握はできていないのだが。

「えっと、あの、私コンビニに入ったらここに居て、それでいきなりあなたがここにいて」

奈月は何とかさつき起こった現象を話す。しかし、

「ごめんよ。さっぱり分からないよ。君に何があったのか。」

それは、男に理解されなかった。

「…ごめんなさい…」

「いいよ、きつと君に何かがあつて興奮してるんだろう。僕は君が落ち着くまで待つから、話はそれからしよう」

「ありがとうございます」

男は、奈月に落ち着く時間を与えた。

男は、奈月の肩を軽く叩き、店のなかへと入っていった。

紅い光は山の間から店と、奈月を紅く染めていた。

何処か分からないこの地に、夕方が訪れた。

「落ち着いたかい？」

男は、店から出て、奈月に話しかける。

「はい」

奈月は、夕方までに何とか自分の状況を文章にすることができた。

「じゃ、何があったのか、話してごらん」

「私は学校の帰りにコンビニに寄ろうとしていたんです。」

「…(コンビニ？確か外の世界から流れてきた本のなかにコンビニに関する記述があったなあ) うん、それで？」

「そして、コンビニに入って気づいたらここにいたんです。」

ありえないことだが、奈月の身に起こったことである。

普通の人ならこの人頭おかしいで終わるのだが、男は違った。

「学校から帰ってくるとき、何か変なことはあった？」

「なかつたです」

「入ったコンビニにおかしなところはあった？」

「特に」

(と、すると境界でこっちに来たわけではなさそうだな)

奈月の受け答えから、男は可能性を推測する。

「…君に正直に言おう。君は幻想入りした」

そして彼が導き出した答えが、これだった。

「幻想入り？」

奈月はそれを問う。

うん、と一つ置いて、「そしてここは、幻想郷だ。そこに入るから、

幻想入りと呼ぶんだ」

幻想郷？と奈月は問い、続いて「つまり、どういうことですか？」

男は、その問いに、こう答えた。

「君は、幻想になったんだよ。本当に」

M e e t o w n e r (後 書 き)

ちよつと読みづらいかも。

少し英語でいう冠詞に当たる部分の修正を完了。

S h e i s k n o w n r e a l (前書き)

少女は現実を知る…

She is known real

「え？」

眼鏡の男性の言葉に奈月は思わず聞き返す。

「つまり、君は異世界に来たんだよ。」

「！」

奈月は驚く。

当然だろう。いきなり見知らぬところに来て「ここは異世界だ」なんて言われて驚きを隠せる訳がない。

「ここは、幻想郷と言った。幻想になったものが訪れる、何でもありの」

「そうなんですか……戻れるんですか？」

驚きつつも眼鏡の男性に問う。

すると、眼鏡の男性は少し悲しい顔をして、

「戻れない、かもね…基本的に幻想郷と外の世界は大結界で切り分けられてる。だから君を含め外の人間は幻想郷には来ることはできないし、逆もしかりだ。それなのに君はここにいる。」

奈月にとって酷な言葉を発した。

その言葉は、暗示する。

普段はどんなに頑張ったところで絶対に来れない幻想郷に、奈月は来てしまったのだ。

そんな稀な現象が、もう一度起きる可能性は限りなく低い、ということを。

もう二度と戻れないかもしれない、ということ。

思春期の少女にとって、酷い現実である。

奈月の思考が停止する。

「……」

時間が止まる。

そして、再び時は、動きだした。

思春期の少女、奈月の涙によって。

「……!どうしたんだい?」

その涙は、眼鏡の男性にも認識できた。

奈月は、泣いていた。

「だって……もう二度と戻れないなんて、そんなの酷いじゃないですか……私はただコンビニに……コンビニに入ったただけなのに……」

眼鏡の男性の顔色は少しだけ悪くなる。

少女にありのままの現実を話して、泣かせてしまった。

「でも、可能性がない訳じゃない。何か戻る方法が……」

状況を改善しようと、眼鏡の男性は奈月に言葉をかける。

しかし、その言葉は最後まで紡がれなかった。

「……」

そして、眼鏡の男性は泣いている奈月を背にして再び店内へと入っていった。

S h e i s k n o w n r e a l (後書き)

現実は時に酷なものになります。

Can her return her to world? (前書)

め。う。う。う。

Can he return her to world?

どうやったたらあの子を元の世界へ返せるか…

男は、泣く少女を背にして歩きながら考えていた。

(霊夢に頼むか…いや、多分面倒臭がるだろう)

(紫に…駄目だ。紫は今冬眠しているはずだ)

いくつか案が頭に浮かぶ。しかし、それらは全て頭で却下された。

(…そもそもあの子はどうやって幻想郷に来たんだろう。紫の境界
弄りで来たわけでもないし…)

次の思考のポイントはそちらへ移る。

どうやって、奈月が来たのか。

原因は分かる。コンビニに入ったことだ。

しかし、何故コンビニに入っただけで幻想郷に来れたのか。

男にはそれが分からなかった。

(境界弄りで来るとすれば大結界に穴を開ける必要がある。だから、
あの子だって穴に落ち込む感覚を感じるはず)

(しかし、あの子は気づいたら僕の店の前に居た…と言っていた)

(何でだ？)

考えれば考えるほど分からなくなる。

もがけばもがくほど穴に落ち込む蟻地獄と一緒だ。

(…くそ、分からないぞ)

そして男の思考は、蟻地獄に落ち切ってしまった。

その時だった。

「香霖！！おい！！」

店の外で、怒声が聞こえた。

(…？魔理沙か…)

「ぐす……え？」

続いて、奈月の泣く声が止まる。

「ここに泣いてる奴がいるじゃん、何で放置してんだよ！！まさか、お前が泣かせたのか!？」

ここで、男が振り返る。

「やあ魔理沙、何の用…ってうわぁ！」

振り返ると同時に男の視界に入ったのは、どこの世界の人に聞いても「This is which!」と答えそうな服装をする少女の姿だった。

三角帽子を被り、箒片手に八角形の手のひらサイズの何かを持つ、魔理沙とかいうらしい少女が。

「ごまかすな！お前はそんな冷たい奴だったのか!？」

そして、魔理沙は男が振り返り向いた瞬間に怒号を浴びせる。

何故か、熱い。暑いでなくて熱い。

「落ち着けよ。分かった。まず質問に答えよう。泣かせたのは僕ではないし、放置もしていない」

「嘘だ！じゃ何でコスプレなんかさせてんだよあいつに!」

「魔理沙。そんなことはしていない。はぁ…」

魔理沙の怒号に、男は淡々と答える。

「あの…」

熱くなる魔理沙に水をかけたのは、奈月の声だった。

奈月は、魔理沙に話しかける。

「お前はもう大丈夫だ！今からこいつになにされたか、こいつの口から吐き出させてやる。」

「違うんです…その人は…何も…」

「隠すなって！何かされたんだろ？こいつに」

どうやら魔理沙は、男が何かした、と疑っているのだろう。

「何も…」

「え？」

「…ほら言っただろ、何もしてないって」

「…お、お前が口止めさせてんじゃないのか！」
「ないない。そんな卑怯なことはいしない」

この言葉が、時を止める。

しばらくして、時を再度動かしたのは、またしても奈月だった。

「魔理沙…さん？私は…何も…されてない…」

C a n h e r e t u r n h e r t o w o r l d ? (後 書 き)

まさかの魔理沙登場です。

T h e y a p l o g i z e t h e m (前書き)

起承転結。今は、「承」。

They apologize them

「…」

魔理沙は、その言葉を聞くと、黙ってしまった。

「私は…勝手に一人で泣いていただけ…です…」

完全に泣き止まない声で、菜月は男の無実を訴える。

「…じゃあ、何で泣いてるんだ？」

魔理沙は、それでもまだ疑っていた。

「私…：香霖さん？によれば…：この世界に来た…：ということ…：みた
いです」

「来た？」

魔理沙は聞き返す。

そこで、男が割り込んで来た。

「…君はもう話さなくていいよ。僕が話す」

男はそう言つと、菜月を後ろにして二人の間に入る。

「え」

菜月は驚く。しかし、男はお構いなく話し続ける。

「この子は、元いた世界からどういいうわけか幻想郷に来たんだ」

「…どうせ紫の隙間、でだろ？」

「いや、違う。いきなりだ。」

そして、魔理沙の疑問をはっきりと否定した。

(…ああ…)

二人を見て、菜月は思う。

(気まずいなあ…)

そして、罪悪感を感じる。

「…信じていいんだな？」

「嘘はない、と誓うよ」

「…分かった、お前を信じる。いきなり乗り込んで罵声して、ごめん」

(くそつ、香霖の目に嘘がなかったぜ)

二人はしばらく話して、ようやく「魔理沙の勘違い」ということで纏めることができた。

そして、魔理沙は、菜月の方を向く。

「名前は知らないが、驚かせてごめんな。」

「いや…、こちらこそ、私のせいで…」

魔理沙は、菜月に謝罪した。何故か、菜月も謝罪した。

(なんで君が謝るんだ…君は何も悪くない)

男は、菜月の謝罪に疑問を感じつつ、

「ごめんよ。僕に知識がなくて」

「大丈夫です」

菜月に、謝罪した。

T h e y a p l o g i z e t h e m (後書き)

後半がすこし雑になってしまいました。ごめんなさい。

Take her to their places (前書き)

少女たちは能力者のもとへと足を運ぶ…

Take her to their places

「あの…魔理沙だ。本名は霧雨魔理沙、改めて宜しく」

場が落ち着くとともに、奈月も落ち着いた。

頬に涙の筋の跡が残っている、が。

そして、魔理沙は奈月に自己紹介をする。

「あ、はい。魔理沙さん。」

「さん付けは苦手だぜ？まあ好きな呼び方で構わないけどよ」

「分かりました、魔理沙さん」

続いて、男の自己紹介。

「僕は森近霖之助という。よろしく」

と、短く言うと、香霖、否、霖之助は奈月に手を差し出した。

「香霖さん…ではなくて、霖之助さんでいいんですね？」

「好きに呼んでもらって構わないよ。香霖ってのは魔理沙の呼び方だけ」

奈月は、霖之助に差し出された手を握る。

「霖之助さん、よろしくお願いします。」

「ああ、よろしく」

この時、二人には見えなかったが、魔理沙の顔が不機嫌そうな顔になった。

二人に自己紹介された奈月は、「会って半日の男女に自分の名前を明かす」ということに戸惑いながらも、自己紹介をする。

「下村、奈月です。よろしくお願いします」

「奈月…いい名前だね」

「私も同意だぜ」

「ありがとうございます」

こうして三人は、知り合いになった。

しかし、奈月には時間がない。

こんなところで油を売っている訳にはいかない。

奈月は、元の世界に戻らなければならぬ。しかし、魔理沙の乱入で話の向きが変わってしまった。

「あの、それで…」

その向きを、奈月が補正する。

霖之助は、思い出したように言う。

「ああ、そうだったね。奈月、君を元の世界へ戻す方法を考えなければいけないね」

「はい」

ようやく話が元に戻ったところで、霖之助は話し始める。

「…僕は、奈月を元の世界に戻す方法が分からない。魔理沙、君もそうだろうか？」

霖之助は、魔理沙に話題を振る。

「そうだな。私は魔法系女子だからな」

(何その草食系男子みたいだな…)

と、魔理沙の言葉に違和感を覚える奈月。

「だが、僕は何も出来なくても、この幻想郷に出来るのはいる。僕は、それを知っている。」

「私だつて知ってるぜ？」

「…それは、誰なんですか？」

奈月の問いに、一つおいて、霖之助は答える。

「妖怪と、巫女…だ」

「！　？妖怪?!」

妖怪。話でよくある、人を襲う存在だ。

と、いつても、種類がたくさんあり、しかも存在はなかなか表面化しないためそれを知るものは少ない。

それが今いる幻想郷にいるというのだから、奈月が驚くのも当然そ

して必然なのである。

「紫と霊夢のことか？」

霖之助の話に魔理沙が補足をする。

「そう。…魔理沙、お願いがあるんだけど」

「なんだぜ？」

「二人のところに、奈月を連れて行ってくれ」

Take her to their places (後書き)

一話ごとの長さが長くなっているような気がする。

S h e i s l e a v i n g (前書き)

しばらく更新サボっててすみませんでした。

S h e i s l e a v i n g

「…いいけど、多分断られるぜ?」

魔理沙の反応に、

「ものは試した。やってみるしかない」と、反応を返す。

「私を何処へ連れて行くんですか?」

やり取りに、疑問を挟む奈月。

驚くのは当然、会って数時間しか経たない男が、女に一人の女の子を名も知らぬ者の元へと連れて行くよう依頼しているのだから。

その疑問に答えたのは、霖之助だった。

「君を元の世界へ返せる能力を持った人のところへ、だよ」

「それって、…霖之助さんが言ってた霊夢さんや紫さんって人ですか?」

「そうだ。僕はその人たちしか君を返せる人はいないと思う」
奈月の疑問に、次々と淡々と答える。

そこで魔理沙が話に入る。

「分かった、霖之助。私が連れていくよ。」

「本当かい?」

「ああ。何か面白そうだしな」

魔理沙は顔に妙な笑顔を浮かべる。何か企んでいる。

(何かする気だな)

(魔理沙さん何か企んでる…怪しい)

その笑顔に、2人は違えど似た思考する。

「よし、じゃあ早いところ行こうぜ、奈月」

「では…よろしくお願いします」

奈月はお辞儀をする。

「んじゃ、表出る」

それを魔理沙は軽くあしらった。

「分かりました」

一つ返事。

店の外に出ようとしたとき、奈月は突然立ち止まった。

「あ、…」

魔理沙はどうした？と様子を伺う。

「ちよつと、待っててもらえませんか？」

「？　まあいいけど、早くしてくれ」

「分かりました。すぐに戻ります」

そして、奈月は再度入っていく。

それを見た霖之助は、尋ねた。

「ん？どうした、忘れ物？」

「違います。ありがとうございます」

「別にそんなのいいよ」

…とは言う霖之助だが、実は内心嬉しかった。

あくまで表面には出ていないが。

「ありがとうございます」

一言。それは少しばかりの静寂を生んだ。

霖之助は、何て言えば良いのか。分からなかった。

そのせいか、顔が少しだけ真顔になる。

そして、

「では、また」

この言葉を言ったあと、奈月は再度出ていった。

(また:ね)

R i d e M a g i c a l B r o o m (前書き)

少女は魔法使いとともに箒に乗る…

Ride Magical broom

「何してきたんだ？」

魔理沙は、奈月に問う。

「忘れ物ないかなー…って」

「そうか。んじゃいこうか」

しかし、奈月にはある疑問があった。

「どうやって、目的地へ行くのか、という疑問。」

魔理沙は歩いていくとも言っていないし、電車バスタクシーその他諸々で行くとも言っていない。

「はい。…でも、どうやって行くんですか？」

その答えに、魔理沙は4文字で答えた。

「ほづきだ」

奈月は、目を丸くする。

「箒。玄関先で箒をはく姿を見たことがあるだろう。あの箒だ。」

魔理沙は、その箒で、目的の場所へと行こうとしている。

「え？箒？」

「そうだ。何かおかしいか？」

魔理沙さん、それあなたの方がおかしいですよという本音を口には出さない奈月。その代わりに、

「魔法少女ごっこするんですか？」

すると、魔理沙は、

「いや、私はごっこでなくて本物の魔法少女なんだぜ」と、真顔で言った。

(魔法使いのコスプレして箒なんてなりきりだよね、ね？魔理沙さんの趣味ってそんなのだったの？)

(いや、でもそんなこといったら私はどうなんだろう？)

魔理沙の言葉の意味を考えてしまう奈月。それに魔理沙が気づく。

「どうした？」

真顔で問う。

「何でもないです…それより行きましようよ早く」
奈月は急かす。

「変な奴。で、さっきのどうやって行くのかという質問に答える。箒に乗って行く」

求めてもいない答えを言う。

「はい。…ということは、箒で目的地まで飛ぶ、と」
そして理解する。

「そのとおり。…っと」

そして、魔理沙は突然箒があるほうに向かって招き猫のような動作をする。その動作は一セットで終わったが。

奈月には、その動作の意味がわからなかった。

魔理沙が手を降ろすと、箒が一人でに直立したかと思えばこちらのほうに飛んできた。まるで生き物のように。

「わー!!」

突然の出来事に、奈月は驚愕する。

「? ? ああ、」

驚かせてごめんな、という顔で奈月を見る魔理沙。
そして、魔理沙は言う。

「ごめんな。驚かせて。今のは魔法だよ魔法」

「魔法…?」

魔法ー

現実では不可能な結果を得る手段の一つ。欧米などで浸透している、一つの概念である。これを持つ者は、罰せられた時代もある。魔法には、そんな歴史がある。

「そつだ。魔法。何でも出来る究極の力さ」

誇らしげに、だけど少しだけ悲しい顔をする。

（命だけは…失わせることしか出来ないけどな）

「ということは、魔理沙さんは魔法で目的地まで飛んで行くんですか？」

「そつだ。」

「…あとの説明はいいな、乗れ」

と、魔理沙が促すと、箒がまた一人でに倒れた。浮いたまま。

魔理沙と奈月は、箒に乗る。

その瞬間。

「奈月イ！行くぜエ！！！」

「え！？まだ心の準備が…きゃあああああ！！！！！」

二人は、光のようにもの凄いスピードで彼方へと飛んでいった。

R i d e M a g i c a l B r o o m (後 書 初)

。...の...。

E n c o u n t e r e d f a i r y (前書き)

妖精は魔法使いに果たし状を叩きつける…

Encountered fairy

「どうだ、慣れたか？」

魔理沙は、後ろにいる奈月に声をかける。

「はい、なんとか」

(でも、さっきいきなりのは心臓止まるかと思った)
奈月は、そう思いながら下を見る。

(ここは高さ何メートル？…すごく高いなあ)

「あとの位でつきますか？」

「分からないけど一人目のところへはすぐだ」

「そうですか…」

そう返し、下を見る奈月。したには、青い草が茂っていた。

(のどかだなあー)

そう思った、筈が、ぐらつと揺れた。

奈月が下を見たせいでバランスが崩れたのだ。

「おっと！ちゃんと前向け、落ちたら死ぬぞ」

「ごめんなさい」

魔理沙に言われた奈月が、前を向き直した、その時だった。

「止まれ！」

何処からか、声が聞こえる。

「？」

「あ…面倒くせー奴が…」

魔理沙は、飽きた顔をする。

「え？知ってるんですか？」

「ああ…そこに居るんだろ。出てこい」

馬鹿にするような声で見えない声を脅す。

すると。

いきなり、真下から何かが出てきた。

「この前の仇！打ってみせる！」

それは、青い服を着て、ひし形の羽根を体につけた小さな女の子だった。

「仇…って魔理沙さん何したんですか?!」

「着いたら話す。今からお前を振り落とすことになるかもしれないから、奈月、私に捕まってる」

そう言つと、魔理沙は腕を腰に当てたかと思うと、空を斬るようにななめに手を挙げた。

よくある、ピンチのときに訪れたヒーローがしそうな動きだ。

瞬間、魔理沙の周りに何かが突如表れた。

「後悔しろ、チルノ」

奈月は、それが何か、すぐに認識することが出来なかった。

よく見ると、それは星型をした立体な物体だった。しかも、箒と同じように浮いている。

そんなに時間が経たないうちに、それらは箒の周りに配置された。

これも、魔理沙が操っているのだろう。

(わけが分からない)

(…でも、私は見えていることしか出来ない)

(後で教えてもらえるんだし、まあいいか)

奈月は考えることをやめ、これから何が起きるのか、見届けることにした。

W i t c h w o n , b u t s h e i s a s k i n g (前書き)

魔法使いは果たし状を受け取り、勝利する…

W i t c h w o n , b u t s h e i s a s k i n g

「行け！」

魔理沙が叫ぶ。

すると、星型の物体から何かかが青い服の女の子のほうに発射された。何発も、連続で。

「そんなの…無駄よ！」

そして、発射されたもの全てが、女の子に当たった。

…ように、奈月には見えた。しかし、それは違っていた。

女の子は、無傷だった。

しかし驚くのはそこではない、と奈月にはすぐ分かった。

女の子の周りに、たくさん氷が浮いているからだ。

（あれ！？さっき発射されたのは…確かに当たったはず、何で無傷なの？しかもあの子の周りに浮いてるのは…氷？何で氷が浮いているの！？）

奈月が目の前の状況を整理しきれなくて混乱している中、魔理沙は煽り混じりに女の子に向かって言う。

「ほー、馬鹿妖精^{チル}。攻撃を防ぐんでなくて無効化するのか。お前にしてはよく考えたな」

この言葉に奈月はキレた。

「魔理沙さん、いくらなんでもこんな小さな子を馬鹿にしすぎですよ！」

それに魔理沙は、こう返した。

「良いんだよ。あつちから手エ出してきたんだから」

このやり取りを聞いて女の子も何故かキレる。

「後ろの！小さい言うな！」

「あー、もう面倒くせエ奴らだな。…」

と、面倒くさそうに言うと、魔理沙は懐から何かを取り出した。

(…カード?)

そして、それを高く天に向かって掲げて、こう宣言した。

「スペル、恋符『マスタースパーク』!!」

(…マスタースパーク?)

瞬間、カードが光り、魔理沙の周りが光り、その光りが魔理沙に引き寄せられるように集まる。

それが収まると、箒が突然揺れ出す。

「わっ!」

奈月は、落ちそうになる。

「奈月、落ちるなよ!行けエ!!」

魔理沙が叫ぶと、目の前がもの凄い光に包まれる。目も開けられないほどの光だ。

「く…:(眩しくて見えない!!)」

思わず奈月は目を固く瞑る。

すると、前のほうから鼓膜が破れるほどの大きな爆音が聞こえた。

そして、

「きゃああああ!!」

という声が辺りに響き渡る。それは真下にフェードアウトしていくように小さくなっていった。

(…今のは…あの子の…?!)

「…時間食ったな。行くか」

魔理沙は少し下を確認すると、何もなかったかのように淡々と言う。

「あの子は?!あの子をどうしたんですか?!」

魔理沙に、詰め寄る奈月。

「ああ、チルノか?私が吹っ飛ばした」

(あの子はチルノっていうんだ)

それでも魔理沙は淡々と答える。

「何でそんなに冷静なんですか?何もしてない女の子を…!!」

さらに詰め寄る奈月。

「落ちるって！…落ち着け奈月、ちゃんとこれには理由があつてだな、幻想郷では認められている行為なんだ」
なだめながら奈月に言う魔理沙。

（いきなり表れた女の子をわけ分からないもので吹っ飛ばす行為が認められてる？）

（幻想郷って本当にわけ分からない、というか分かるうとしてくれない…）

「…魔理沙さんを信じます。」

「ありがとう奈月。ちゃんと話すから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6305t/>

東方時間歪 ~ Broken stream of the time.

2011年6月13日12時31分発行